

ふりかえって
幼児期の教育を考える

浜田 駒子



はじめに

T雄の幼稚園生活の記録を載せていただいたのは、今から十六年前である。

T雄は今年二十歳、大学二年生になった。

私は当時専業主婦であったが、現在は、住んでいる神奈川県相模原市とその周辺都市で家庭学級、婦人学級、P・T・A、幼稚園の母の会などの講師に呼ばれ、子どもを育てることをお母さんたちと一緒に考え、話をする仕事をしている。

そこで大勢の若いお母さんたちとの接触がある。

そういう目である頃のT雄をとりまく環境をふりかえってみると、当時母親として見えなかったものが鮮明にみえてくる思いがする。

当時の記録のうち目立つことは、幼稚園への不適応と母子の会話の量である。

幼稚園への不適応

幼稚園での記録によると、集団生活への不適応が目立つとある。それは、幼稚園入園から二学期が始まる頃までなので、その後卒園まで不適応という状態が続いたかどうかかわか

らない。

その不適応というのは、

●並んでいる友だちの帽子をポンポンはねて脱がしてしま
う

●背が大きいので後にならぶのだが、前の子を押すので、並
んでいる子は次々に前へ玉つき状態にぶつかってしま

●おままごとするよりも外が好き、それも端からブランコ、
おすべり、ジャングルジムと順々に少しずつやって長つづき
しない

というような状態をさす。

不適応をおこしていた原因は、次のようなT雄をしばって
いた枠があったのではないかと考える。

物理的な枠

家は三帖と四帖半の二間の一戸建であった。庭はない。と
にかく狭い。裏口は大家さんの庭になっているのであるべく
出さないようにしていた。家の前は道路である。幼稚園は力
いっぱい遊べるのでとても楽しみにしていた。

「ジャングルジム、ブランコって順々にやって、一通りや
ったら又はじめからやるの」と嬉しそうであった。

精神的な枠

「ある物事に直面したとき、まず母が認識し、ついで子ど
もにそれを認識させ、子ども自身でそのことを解決して行く
ようにふるまう」ということを私は丹念にやって育ててきた
つもりである。その解決の方向は小さい時から両親の設けた
枠の中である。子どもにこの枠を示し、できなかつたらお尻
を叩いたというのではない。口には出さねど何となくわかっ
ているもの——文化——というものである。言葉づか
い、食事のマナー、他人への心づかいなどでその枠からはみ
出る行動をしたとき、

「それでよかつたかな」

と声をかけた。

たとえば、ゲームをしているときに、「お父さんばかだね。
こうやるんじゃないか」というような言い方をする子どもが
いるが、T雄は父に対してこういういい方はしない。母は禁
止はしないけれど、こういういい方を母は好きでないと、何
となく思っているのである。それが枠である。

最近、父はT雄を飲みに誘う。近所のすし屋さんで隣に座
って飲んでいた人が、「大学の先生のところ、学生が遊び

に来て飲んでいるとばかり思つて話をきいていたら、どうも話の内容がお父さんと息子さんらしい。ヘー、おやこですか」といわれたと、父は嬉しそふであつた。他人から見ると他人行儀で固苦しく見えるかも知れないが、T雄の言葉、つかい、態度の中にあるやさしさみたいなのが好きだと父はいう。

こうして身につくまでは、こうしると命令はしないけれど、母親がいつもそばについていて、いろいろ粋からはずれると「そうしてよかつたかな」「大事なお父さんに、そんないい方してよかつたかな」などくり返した。これはT雄にとって少々面倒であつたのかも知れない。

幼稚園へ行くとその面倒な母からのかけ声がないので、思ひ切りのびのびと走りまわれたことである。そして次から次へ不適應といわれることをしていたのだと思う。

小学校以後、不適應といわれたことがなかつたので、幼稚園での御指導がよかつたものと感謝しているが、卒園までに、どのように変化して行つたのか園での記録があつたらよかつたなと思う。

T雄にきく

「小さい頃、粋みたいなのを、あなた自身感じていた？」

「ウン。家を一寸出た所に、広い道があつたでしょう。あれから先は越えて行けないと思つていた。あそこに住む子どもたちは僕とちがうなという気がしていたよ。だって、人の見ている前で平気でウンチしちゃうんだよ。僕にはとつてもできないなと思つて見ていたんだ。そんな感じ」

T雄にとって五十メートルほど先の道路までが、自分の安心できる範囲だつたのだと思う。

マッコと呼ばれていたT雄と同年の子が、よく向う側から遊びに来ていた。自由に生きているという感じで、雨がふつてもごはんをたべに帰る以外は、外で運んでいた。

「道路のこつち側では、家とか、お母さんとか、友だちとかで重くのしかかるようなものはなかつたかしら」

「べつに感じなかつたなあ……。マッコみたいに、どんなことでもできるといふ感じではなかつたけれど」

夫にきく

「先生が記録に『不適應』と書かれたが、適應性というのをもう一度考えなおす必要があるのではないか」と夫はいう。「一般に幼稚園の教師は、二言目には適應性があるとかないとかいうが、教師の筋書き通りにいうことをきけば、適

応性があるという場合が多いように思う。それは順応できるということだよ。環境に順応することは適応性の大切な要素だが、イヤイヤやっついては、いつか破綻が来てしまうから本当の適応とはいえない。T雄は初めての場所でも、自分からブランコやおすべりやらで楽しそうに走りまわっていたのだから、環境に全然不適応ということでもないと思う。適応性ということより、自己制御に欠けていたといえるだろう。

家では、園で不適応といわれても、幼稚園でのことをあれこれいわなかった。あれがよかった」

「それともう一つ。家でいい子の枠が強制されるあまり、幼稚園へ行ってもいわゆる『いい子』になってしまう子がいるが、少なくともT雄は『いい子』ではなかった。『いい子』は先へ行つて面白がなくなるよ。今、研究している幼児の創造性の因子の中に、『自己実現のための自由への要求の強さ』というのがある。それは、『良い子であろうとするあまり、自分の行動を枠にはめて自由奔放にふるまえない。模範的だが自分を自由に表現出来ない子ども』という概念の対概念、『自分の気の向くままに行動し、他を無視して自己表現しようとする自己中心性のつよい子ども』これにT雄はあてはまると思う」

母子の会話の量

次に目立つのは会話の量である。まわりの母子と比べても、T雄の妹や弟と比べても量が多い。小さい時から私の話をうれしそうに聞いてくれたし、彼も楽しくてたまらないという表情で話をした。受験勉強中でも「そんなに楽しそうに話をしないでよ。僕も話に来なくなっちゃう」と、隣の部屋から出て来て一しきり話に加わった。青年期になっても話の楽しさを持っていられるのは、幼児期に一方通交の会話でなく、やりとりをする楽しさを持った会話をしていたからだと思ふ。

昔から私を知る人は、「あなたは幼稚園の頃から、T雄ちゃんに頼っていたわね」といわれたくらい、父は勤めで夜おそかったり、徹夜だったりしたので、T雄に何かと相談し、話し相手にしていたのだと思ふ。

今反省しているのは、T雄の下に妹、弟が生まれても、まだT雄との会話の量はかわらなかった。妹や弟も話ができるよう心がけてはいたが、どうしても、T雄が話して、皆が聞くという形が多かったということが、T雄が大学の寮に入ってから始めて、それに気づいた。妹や弟が話の送り手になること

が、この頃多くなつたからである。

聞くことももちろん大切だが、自分の気持ち、意見を述べることも大事なことで、物の見方、考え方が育つ。四歳だつて、五歳だつて、その子なりの意見がある筈である。

先ほどの梓ぐみを作る主な働きは、この会話によるものだと思う。この量が多ければ多いほど、母と子の気持ちの共通する部分が多くなるのではあるまいか。

梓はつきつめて行くと、父母の生き方、趣味などとかかわり、各人各様である。食事のマナーや言葉づかいは大きくなつてからでも間に合うが、「他に対するやさしさ」は、教えるものではないだけに、一朝一夕に伝えられないと思う。感じたことを話し合つて育つ部分である。

若いお母さんたちに接して考えたこと

叩く

四、五歳児を持つ母親のグループで、「みなさんは一日に何回くらい叩いているか」というのが一番知りたいことであつた。叩くか、叩かないでしつづけるかは問題の焦点ではなかつた。

「叩かれて育てられている子は、ピリッとしてますよね」
「私の母は叩いて私たちを育てた。一人もグレた人はいない。だから私も叩いて育てる」

私は今、そのグループのお母さんたちに、毎日、何時ごろ、どんな場面で、どうやって叱つたか、子どもとのやりとりを小さなカードに書いてもらっている。書くことによつてお母さん自身の変化と、母親たちが、どんなふるまい方をしようとしているのかを見たいと思つている。お母さんの中で、「我が子どもを叩くと、孫が叩かれると思うと、孫がかわいそうで叩くのをやめました」という人がいた。

手間がかかることをいやがる

夕方、食事の支度をしているとき、デパートで買い物をしている時、テレビを見ている時、

「何でおしつこしたがるのよ」

「ゆっくりテレビも見られやしない」

母親から子どもが無関係になつた時、自立したといたいのだと思ふ。子どもが自分勝手に遊び始めれば、せいせいするのである。

四、五歳の子どもなら、母とのつながりの中で自ら行動し

ている方がいい。母は必要のある時だけ子どもが育つような言葉をかける。子もそれに答える。母もそれによって自分が育てられているという気持ちを持つのがいいと思う。

ほんとうのやさしさに欠けた人が多くなったように思う。

女性は昔からやさしく、男性もやさしくなったといわれているが、美しいもの、やさしいものに対してはやさしいが、みにくいもの、年寄りなどにも本当にやさしいだろうか。

自分の気にいらなからといって叩いたり、面倒くさいといつてあまり子どもにかかわらないでいて、ほんとうのやさしさが育つものだろうか。

おわりに

T雄は大学に入って家から離れたとき、梓から離れた。梓から離れたということは、母から離れたともいえる。

父の出した大学を選んだので、父とは、「後輩フトン敷け」

「ハイ」、「後輩飲みに行くか」「ハイ」と、ぐっと距離がちぢまった。

友だちもみんな後輩になるわけで、よく、泊りにつれて来る。入学当初から三人で共同炊事をし、今一人ふえて四人で食べているそうだ。「味つけはいつも僕」だそうで、したが

って味に対する不満はない。夜は一年生の間は殆んど友だちと一緒でないと居られないみたいなきもちだったが、二年になって週のうち半分は十二時ごろまで友だちと、半分は部屋に帰って本を読んでいるそうである。

父も母もまだ学校を見たことがない。T雄の話で下水や配線の地下工事のところが懐中電燈を持って探検したとか、

「宿舎から学棟まで二十分も歩くんだよ。オートバイ買って」

「危い！ オートバイなんか」

父と、祖母が同時に否定したが、広い学校なんだということにはわかった。

筑波山の山の上で日の出をみようかとフト思い立ち、友だちとオートバイに二人のりして行って、ケープルカーにのって上まで行きたかったけど、二人のを合わせてものれるだけの金なかったんで、あきらめて帰って来たという話をきいていると、親元離れて何をしているのかわからないと思う。生まれた時から心をこめて育てて来たからと、遠くはなれて今ももう祈るしかない。

本当に社会に適應して、生き生きと過ごしてもらいたい。ただ、それだけである。

(了)